

日本医学会分科会活動報告

一般社団法人日本神経病理学会
理事長 柿田 明美

I. 医学および医療の水準の向上への貢献が日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会の独自の活動を以下に留意して記載をしてください。

a. 特に学術的に重要と考えられるもの

① 脳神経疾患を対象とした臨床病理学の確立

脳神経疾患の多くは臨床診断が難しい。患者の病態を理解する上で、剖検による病理組織学的解析は最終診断となる重要な医療行為である。日本神経病理学会では、設立当初から、病理医とともに精神科、脳神経内科、脳外科、小児神経科などの臨床医でもある学会員が自ら剖検を行い病態理解に努めてきた。こうした伝統は、おひとりおひとりの患者の臨床病理像の特徴を捉え学会員が情報を共有する文化として定着した。その結果、年次学術集会や地方会においては、病理標本を持ち寄って顕微鏡で観察しながらディスカッションを行う発表形式が定型となり、また国際機関誌『Neuropathology』に Case Report が主要なカテゴリーとして育ってきた。こうした取り組みから、レビー小体型認知症や、認知症を伴う筋萎縮性側索硬化症など、新たな疾患概念の確立に多大な貢献がもたらされ、当該領域の学術の発展に寄与してきた。

② 脳神経疾患の病態形成機序を理解する体制の確立

近年、脳神経疾患の多くは病態関連分子の同定によって病態理解が進んだ。日本神経病理学会では上記①の活動を基盤に、分子病理学的解析が進められ、病態形成機序の理解に向けた重要な知見を提供してきた。例えば、ポリグルタミン鎖の異常伸長に起因する幾つかの神経疾患：ポリグルタミン病（歯状核赤核淡蒼球ルイ体萎縮症など）の疾患概念の確立や、神経変性疾患の疾患概念としてのプロテインパチー“特定の蛋白質（例えば TDP-43 など）の構造異常に起因する疾患群”の提唱に貢献し、当該領域の学術の発展に寄与してきた。

b. 当該領域における国際的な役割

病理解剖をめぐる世界各国の状況は大きく異なる。脳神経系を含む全身解剖を恒常的に実施可能な国は、アジアでは日本以外にはない。日本神経病理学会は欧米とともに当該領域を推進する主要なアカデミア組織としての役割を担っている。既に2回の国際神経病理学会（1990年、2018年）を日本神経病理学会が誘致し日本で開催した。また、アジア・オ

セアニア神経病理学会を組織し、当該領域の情報発信に努めている。

c. 活動からもたらされる社会的な意義

脳神経疾患患者の診療と治療の両面で、日本神経病理学会の活動は大いに貢献してきた。上記 a.①の病理解剖を通じた病態理解や診療力の向上のみではない。脳腫瘍やてんかん原性病巣を対象とした外科病理診断は、患者の治療法を選択する上での極めて重要な意義を持つ。また、上記 1.②を推進するため、日本神経病理学会はブレイン・バンク委員会を組織し研究用リソースの拡充と有効利用に努めてきた。こうした活動から新規治療薬の開発に向けたニューロサイエンス研究や治験も進められている。例えば、てんかん原性病巣の代表的な病態である限局性皮質異形成 II 型の原因として、mTOR の体細胞変異を同定し、同疾患患者を対象とした同分子阻害剤が臨床で使用されている。

d. 学会運営上留意している点

当該疾患を診療している複数の臨床科の医師、病理医、基礎研究者など、多彩な専門性を備えた学会員から構成されることを考慮し運営している。理事は選挙で選出された会員に加え、こうした専門性も考慮した推薦理事を選定し、定款に従って代議員会で決定している。

II. 日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会と他の分科会との連携による活動を記載してください。

日本神経病理学会の学会員が多彩な専門性を有することから、さまざまな分科会と連携した学術活動を行っている。それぞれの分科会が行っている年次学術研究会において合同でシンポジウムやワークショップ、あるいは市民公開講座を開催している。また日本神経病理学会と他の分科会との合同学術大会の開催を計画している。こうした活動は、関連性の深い複数の分科会会員に、より専門性の高い学術情報を提供し、また医学・医療の面での意義を広く知っていただくことにも寄与している。